

主 題：ユダの勧め⑤

聖書箇所：ユダの手紙 21節

「ユダの手紙」、今日は21節のところを見ていきます。救いに与った私たちが主の前を正しく歩み続けていくためにはどうするのか？ということ、ユダは私たちに教えてくれています。みことばに立ち続けるだけでなく、みことばを生きることが必要だとユダは教えました。みことばを生きることによって私たちの信仰が成長するからです。ですから、彼が先ず私たちに勧めることは、救いに与ったなら、霊的成長を目指してそれに努めていきなさいということでした。感謝なことに、私たち信仰者は信仰において成長します。成長する信仰を神は私たちにくださったのです。私たちの心には「成長したい」という願いがあり、成長するために必要なものはすべて神が備えてくださる。私たちはそれによって成長していくことが可能なのです。ユダは「だから、成長に努めていきなさい」と言います。

そして、どうすれば成長するのかを見て来ました。どれほどみことばを聞いても憶えても、それを実践しなければ成長しないということでした。どちらかという、私たちはみことばを聞いただけで満足しているかもしれません。どれだけのみことばを知っているかが重要で、どのように生きているのかはこの次になっているかもしれません。大切なことは「みことばの実践である」と見て来ました。

二つ目に彼が教えたことは、見たように、20節の最後にあった通り「聖霊によって祈りなさい」ということでした。「祈り」です。でも、この祈りに関して、私たちの中にはいろいろな誤解があります。みことばが私たちに教えている「祈り」は「神のみこころに沿って祈ること」でした。私たちの願い事を叶えていただきたいと強く願って、神に求め続けることではないということです。もちろん、私たちの願い事を神に知っていただくことが間違っているわけではありません。でも、私たちが祈りによって一番に求めることは「神のみこころが為されること」です。そのことを見て来ました。

ですから、私たちは神のみこころが為されることを求めるだけでなく、示されたみこころを心から受け入れるその信仰が必要なのです。それが自分の願ったこと、また、自分が考える最善でなかったとしても、私たちは神を信頼することが出来ます。神は必ず最善しか為すことができないお方だからです。私たちが学ばなければならないのは、自分が考える最善と神の示される最善が違ったときに悩んでしまうことです。それは自分の考える最善もまんざらではないと思っているからです。比較にもならないこと、私たちに何が最善なのかが分からない、ご存じなのは神だけです。その神の最善が示される、だから、私たちはそれを求めていきなさいと、ユダは教えてくれるのです。

実際に、信仰者はそのように生きました。あのダビデというイスラエルの王もそのように歩んだことを彼自身が記したみことばに見ることが出来ます。詩篇40：8にこのように記しています。「わが神。私はみこころを行うことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。」、その前の7節には「…巻物の書に…」ということばがあります。つまり、ダビデ自身は神が記された書からみこころを知り、それを「行うことを喜びとします。」と告白しています。彼がどれほどみこころを求めていたのかを伺い知ることが出来ます。しかも、実践するために「あなたのおしえは私の心のうちにあります。」とそのように告白しています。神のみこころを行っていきたい、そして、行うためにそのことばをしっかりと自分の心のうちに留めておくと言うのです。ヤコブが言ったように、私たちの問題は聞いてもすぐに忘れてしまうことです。ダビデは実践するために、みことばをしっかりと心のうちに刻んでいた、すぐに忘れなかったということを私たちは見て取る事が出来ます。

同じ詩篇でダビデはこのように証しています。詩篇143：10「あなたのみこころを行うことを教えてください。あなたこそ私の神であられますから。あなたのいつくしみ深い霊が、平らな地に私を導いてくださるように。」、と、ダビデは神のみこころを行うことを強く願っていたのです。そして、そのことを神に求めたのです。というのは、みこころを、みことばを実践するために必要なのは神の助けだということを知っていたからです。恐らく、皆さんが驚かれることは、旧約で教えられている内容も新約で教えられている内容も全く遜色がないということです。同じことを教えるのです。主は喜んでみこころを教えてください。私たちのみこころの実践において必要な助けを常に与えてくださるのです。そのように生きなさいと新約で教えているし、実際に、旧約においてダビデはそのように生きていたことを証しています。

ですから、私たちの祈りは「主のみこころを求める」ものです。でも、確かに、最初に話したように、この祈りに関していろいろな誤解があることも事実です。

◎祈りに関する誤解

(1) 欲しいものを願い求める : 私たちはイエス・キリストを信じる前にも祈っていました。様々

なことを祈っていました。では、イエス・キリストを信じたときに、私たちはかつて祈っていたその祈りをそのまま持って信仰に入ってきて、クリスチャンになれば神は祈りを聞いてくださると思っているかもしれませんが。これまで祈っていた祈りをするによってその願っているものを手にすることが出来るのではないかと、そう思っている人もいるでしょう。私たちは聖書がどのように教えているのか、聖書の教えに立たなければいけません。私たちの誤解の一つは、あなたがたの欲しいものを求めたらいの、そうすれば与えられるという、そのような考えがあることです。その人たちが使うみことばは、ヨハネ 15 : 7 「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」ではないですか？そうすると、何でも欲しいものを求めたらいの、それはかなえられるからと…。でも、彼らは大切な箇所を抜かしています。このみことばの初めに「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、」と書かれています。

実は、この7節の初めには「もし」という接続詞が付いています。つまり、「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。」ということには条件があるということの主は教えているのです。その条件とは何でしょう？「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、」と、これが条件です。このことが為されているならあなたがたのほしいものを求めなさいと言われるのです。この箇所は私たちに大切な二つのことを教えています。

・「救い」のこと : 「あなたがたがわたしにとどまり」とあります。「とどまり」とは「住む、滞在する」ということです。新約聖書に118回も出て来ます。つまり、これは弟子たち、人と神との特別な関係のことです。あなたがたがわたしのうちに住み、わたしがあなたがたのうちに住むということ。主イエス・キリストに与えられた神との特別な関係を言っているのです。イエス・キリストを信じている皆さんに「あなたの神はどこにおられますか？」と問いかけるなら、少なくとも私たちは「主は私のうちにおられます。」と答えるはず。なぜなら、ヨハネ 14 : 17に「その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」とあるからです。私たちクリスチャンのうちに聖霊なる神が住んでいてくださるのです。つまり、神と特別な関係に入れられたのが私たちクリスチャンです。ですから、ヨハネ 15 : 7で「あなたがたがわたしにとどまり」と言ったのは、神と特別な関係にある人のことです。神が心の中に住んでいる状態を表しているのです。ですから、祈りが聞かれるために、何でも欲しいものが与えられるためには、先ず、救いに与ってなければならぬという条件を教えているのです。

・その人はみことばによって支配されていること : 「わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、」とあります。この「わたし」とはイエスご自身のことです。「わたしのことばが」、主イエスのおことば、神の真理のことです。「とどまる」は今見たように、その人のうちに神のことばが住んでいる状態です。また、この「とどまる」ということばには「継続して活動する、活発に働いている」という意味があります。つまり、ここで教えられているのは、神のことばがその人たちの中で活発に活動している様子です。言い方を変えるなら、みことばによってその人たちの生活が支配され、生活が導かれていることです。

ですから、主が言われたことは「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。」、但し、そのためにはあなたがたは救いに与ってなければならぬし、みことがあなたがたを支配していなければいけないということ。みことばが心を支配していると言いました。だから、祈りは聞かれるのです。なぜでしょう？みことばが心を支配している場合、その人が求めるのは神のみこころ以外にはないからです。悲しいことに、私たちの心がこの世の様々なことに支配されているなら、私たちはいろいろなものを求めます。「あれが欲しい、これが欲しい」と。でも、神のことばが私たちを支配しているなら、言い方を変えるなら、神が私たちを支配しているなら、私たちが求めるのは「神のみこころ」であり「神の最善」です。

ですから、この7節が教えているのは、救いに与っていること、そして、神がすべてを支配しているとき、その人が願い求めるのは「主よ、私にはこういう願いがあり、こういう必要があり、こういう課題があります。でも、どうか、あなたのみこころが成りますように。」で、このように祈るゆえにその祈りは聞かれるということ。だから、私たちが必死になって祈ったとか、断食して祈ったとか、徹夜して祈ったとか、そういうことで神はみこころを曲げられたり変えられたりするの？ということ。有り得ないのです。この方は主権者です。この方は何が最善であり、何がご自身の栄光を現すことに最善かをご存じです。私たちはこの方によって造られたのです。私たちが求めることは「主よ、どうかあなたのみこころがなされ、あなたの栄光が現わされますように。」で、そのことを願いながら歩むのです。だから、神さま、私たちの欲しいものを何とかくださいとねだることはありません。「主よ、あなたのみこころが成りますように。そして、あなたのみこころに喜んで従っていけるように助けてください。」と、そういう信仰者の祈りは必ず聞かれるのです。

ですから、お分かりになったように、何でも欲しいものを求めてその祈りがきかれるというのは聖書の教えではないということです。この条件に記されているように、信仰者が求めるのはただ神のみこころです。その祈りは必ず聞かれると、それが聖書が教えていることです。

(2) イエス・キリストの名によって : また、このような誤解もあります。「わたしの名によって求めなさい」と、何でもイエスの名によって求めるならそれは与えられると考えます。ヨハネ14:14、15には「:14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。:15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」とあります。16:24も見てください。同じようなことが書かれています。「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」と。

そこである人たちはこのように考えます。祈りの最後に「主イエス・キリストの名によって祈ります」ということばを入れなければその祈りは聞かれず…。そのように信じ込んでいる人がいます。「イエスの名によって」と言わなかったからその祈りは聞かれずと言うのです。そのようなことを聖書は教えていません。「イエスの名によって祈る」と付けたなら、まるで魔法の杖のように何でも聞かれるということではないのです。「名」というのは「その人」を指し、また、「その人のみこころ」を指すのです。つまり、この箇所ではイエスによって教えられていることは、あなたの祈りが主のみこころと一致することです。主ご自身と一致すること、そのときにその祈りは必ず聞かれるということです。

ですから、こうして聖書の中で「祈り」を見て教えられることは、信仰者としてこの地上を生きていくときに、私たちは常に神の前に祈り続けて行くことが必要ですが、私たちは主のみこころを常に求める人になっていくようにということです。そして、示される神のみこころに喜んで従う人になるようにと、そのようにみことばは教えるのです。今、見て来たことをヨハネは非常に分かり易く教えています。Iヨハネ5:14「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。」と、今、私たちが学んだことがここに記されています。「何事でも」、すべてのことです。それがもし神のみこころにかなうこと、それを私たちが神に願うなら、それは必ず聞かれるのです。そのことをしっかり覚えて私たちは神の前に立たなければなりません。繰り返しますが、あなたの必要やあなたの重荷など、すべてのものを神の前に持って行くことができます。そのときに、私たちがしっかり覚えておくことは、神のみこころが最善だということです。あなたの考えることよりも、神のみこころだけが最善なのです。それを求めることです。そして、必ずみこころが示されることを期待して求めるのです。神は私たちの弱さを知っておられ必要をご存じです。私たちはその神を信頼することです。

☆この地上にあって私たちはどのように生きていくのか? (前回からの続き)

3. 神を愛すること 21節

21節に「神の愛のうちに自分自身を保ち、…」と書かれています。この「愛」は「アガペーの愛」が使われています。それを保つようにと命令されているのです。ユダが命じていることは「神の愛のその領域のうちに自分自身を保つ」ということです。つまり、神の愛の領域の中に自分自身が留まり続けるということです。そのように教えるのです。でも、具体的ではありません。どのようにして生きていくのか? イエスご自身がそのことについて教えているので、もう一度ヨハネの福音書を見てください。ヨハネ15:9でこのように言われています。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。」と。私たちが今見ている通りのことです。これはどういう意味か? 説明してくれています。次の10節に「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。…」と書かれています。愛の領域のうちに留まるとはということなのか? イエスは言われています。それは「あなたがたがわたしの戒めを守るなら、」です。それが「わたしの愛のうちに留まること」だと。「あなたがた」とは弟子たちですからこれは人間のことです。

10節の続きを見ると、「それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、」とあります。この「わたし」とは「主」のことです。ですから、イエスご自身が弟子たちに話されたこと、そして、イエスご自身が実際に歩んでおられたこと、それをここに記しているのです。イエスは「わたしを見てごらんください。わたしは父の戒めを守り続けている。それがあなたがたへの模範なのだ。あなたがたも同じようにわたしの戒めを守っていきなさい。」と言われたのです。それが「わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。」とこのように説明してくれています。

神の愛のうちに自分自身を保つとはどういうことか? また、神の愛のうちに自分自身を保つためにはどうすればいいのか? 主イエス・キリストが神のみこころに従われたように、あなたがたも神のみこころであるみことばに従うように、従い続けるように、神が喜ばれることを行い続けていきなさいと、そのように言うのです。それがまさに、愛に留まることだと。

Iヨハネ2：5で、今私たちが学んでいることをヨハネ自身が教えてくれています。「しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。」と。ここでヨハネは「みことばを守っている者」と言っています。「守っている」は現在形ですから、みことばを守り続けている人です。人がみことばを守り続けているなら、その行為は次の二つのことを明らかにすると言うのです。もちろん、これは失敗がないということではありません。100%神の命令に従っているのか？そんな人はどこにも存在しません。失敗すれば神の前に告白しつつ歩み続けるのです。でも、少なくとも、神のみことばに従っていきたい、主のみこころに従っていきたく願って歩んでいる人たちのことです。その歩みが何を明らかにするのか？

◎みことばを継続して守り行っている人は、

(1) 救われていることを明らかにする : 「しかし、みことばを守っている者なら、…それによって、…」と続きます。「私たちが神のうちにいることがわかります。」と、先ほども見たように、みことばを守り続けようとしている人たちは神のうちにいるということです。神と特別な関係にあるのです。神によって生まれ変わったゆえに、その人にはこのような願いがあるのです。救いに与った私たちは神のみことばに従っていきたく願うことを持ちます。失望している人もたくさんいるでしょう。なぜなら、どんなに頑張っても実践できないからと…。でも、そのときに私たちはその罪を告白しながら歩いていくのです。

でも、救いに与った者たちの心には間違いなく、神のみことばに従っていきたく願う願いがあります。ヨハネが言うように、その願いをもって生きている人たちは神のうちにいる、そのような歩みをしたということはその人が神のうちにいる、つまり、救いに与っていることを証明すると言うのです。

(2) 神を愛していることが証明される : 「みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。」と書かれています。この「神の愛」ということばを主語として解釈するなら、「神のみことばに従うことによって、その信仰者は神の愛をより深く経験していく」となります。恐らく、信仰者である皆さんはそのことを経験されているでしょう。神のみことばに従うことによって本当に神を身近に感じるようになった、本当に主が私とともに歩んでくださっている、主は本当に約束を守られると、そのようなことを強く実感することがあるでしょう。もし、この「神の愛」を主語的に解釈するならそういう意味だとヨハネは言ったこととなります。

もし、また、この「神の愛」を目的語として解釈するなら、それは「神への愛」です。つまり、みことばを守ることがあなたの神への愛を証明するということです。恐らく、この箇所ではヨハネは「神の愛」を目的語的に使っているのでしょう。ここで彼が言いたかったことは、神のみことばに従う人たちは、その人が神を愛していることを証明するということです。

また、「確かに神の愛が全うされている」という「全うされている」ということばに引っ掛かります。このことばの意味は「完成する、完全にすること」です。しかし、これは神に対する完全な愛を示しているわけではありません。というのは、「みことばを守っているなら、その人は神への愛、完全な神への愛を示している」というと、私たちの神への愛は完全でないことを知っているからです。神を愛していると言っても、私たちの歩みは神の前に不完全です。神を愛していると言いながら、私たちは神以外のものを愛してしまう者です。私の神への愛は100%完璧だと言える人はいますか？そうありたく願っていても、そうでない自分に気づいています。

では、ヨハネは何を言いたかったのでしょうか？ヨハネは「神に対して完全な愛を示している」ということを教えているわけではありません。今話したようにだれも地上にあって神への完全な愛を示すことが出来る人はいません。ですから、ここで「神の愛を全うする」ということは、自分の神への愛の完全さの度合いを教えているわけではありません。何%の神への愛と、そのようなことではありません。あなたの神に対する愛には「行動が伴っている」ことを言っているのです。というのは、Iヨハネ3章には「愛の実践」のことが書かれています。3：16「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」と、神の愛とは行いの伴った愛です。ことばだけではなかったのです。イエス・キリストがご自分のいのちを捨ててくださった、その行いによって愛が分かったのです。17節「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」と、困っている人がいてその必要を満たすことができるにも関わらず心を閉ざしているなら「どうして神の愛がとどまっているでしょう。」と。18節には「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。」と書かれています。

ヨハネが言いたいことは、もし、愛に行いが伴っていないなら、その愛は不完全だということです。ということは、愛に行いが伴っているならその愛は完全だということです。何%の愛で神を愛していますか？ということではありません。行いが伴っているか伴っていないかによって、愛が完全か不完全かということを知っているのです。

なぜなら、私たちが神からいただいた愛は行動を生み出すものだからです。信仰が生きているように、神がくださった愛は行動を生み出すのです。死んだ愛ではなく生きた愛をいただいたのです。そして、その愛は行動を生み出すのです。ヨハネ 14 : 21 からご覧ください。「:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。…」、23 節をご覧ください。「:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。…」、24 節「:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。」、ですから、神への愛は、感情的に神に対する暖かい思いがあるとかないとかではなく、それ以上のものです。神への愛は神への従順です。なぜなら、それを神がお喜びになるからです。だれかを愛しているならその人が喜ぶことをしようとし、神に対する私たちの愛は、ことばだけでなく形となって現れます。神が喜ばれることを実践しようとするのです。神が行いなさいと言われたことを、私たちは神の助けをいただいて実践しようとするのです。だから、「神の愛のうちに留まる」ということ、今日、私たちはそのことを見ているのですが、「神の愛のうちに自分自身を保つ」ということは、「神の愛のうちに留まり続けること」です。神の愛は変わることがありません。私たちの神への愛が変わるのです。神が喜ばれることを行っているのか？それともそうでないのか？神の愛のうちに留まり続けるなら、神が喜ばれることを継続して行い続けるのです。そのことをユダは教えるのです。

私たちは歴史からいろいろなことを学ばなければいけません。たとえば、イスラエルがなぜ敵に敗北したのか？聖書はそのことを記しています。イザヤがイザヤ書 42 章に分かり易く記しています。実は、この 42 : 1 - 17 にはイスラエルのこの世に対する使命が書かれています。特に 6 節「:6 **【主】**は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。」、これが神のご計画だったのです。つまり、イスラエルを通して、このイスラエルの神こそが真の神であるというその真理の光を明らかにしようとしたのです。ところが、悲しいことに、イスラエルはその務めを果たすことがありませんでした。18 節を見ると「耳の聞こえない者たちよ、聞け。目の見えない者たちよ、目をこらして見よ。」と書かれています。つまり、彼らは神のみこころを知りながらそれに従うことをしなかったのです。20 節には「あなたは多くのことを見ながら、心に留めず、耳を開きながら、聞こうとしない。」とあります。

なぜ、イスラエルはさばかれたのか？恐らく、ユダがさばかれたバビロンの捕囚に引いて行かれたときに、彼らはこのみことばを見て思ったでしょう？「なぜ、私たちにこのようなことが起こったのか？なぜ、私たちは滅んでしまうのか？なぜ、私たちは敵に敗北するのか？」と。「でも、この箇所を見たときに明らかだ、神に原因があるのではなく、自分たちにあるのだ。自分たちの罪が原因だ。神に従わないという不従順の罪、それがこの悲惨な結果を自分たちにもたらしたのだ。」と。

42 : 24 を見てください。「だれが、ヤコブを、奪い取る者に渡し、イスラエルを、かすめ奪う者に渡したのか。それは**【主】**ではないか。」と、なぜ、こんなことが起こるのか？主のわざだと言います。「この方に、私たちは罪を犯し、主の道に歩むことを望まず、そのおしえに聞き従わなかった。」、だからだ、神への不従順がこのさばきの原因だと気付くのです。私たちが学ぶべきことは、神はこのようにして生きていきなさいと教えます。神のみことばに従って生きていきなさいと。それに従うかどうかはあなたの責任だということ。正しい選択をするならそれにふさわしい報いがあります。でも、正しくない選択をするならそれにふさわしい報いが伴うのです。

このイスラエルの民が学んだこと、また、同時に、私たちが学ぶこと、それは、神に対して不従順ならそれにふさわしい報いが自分に訪れるということです。イスラエルがさばかれた理由、それは神の教えに聞き従おうとしなかったことです。

そして、今度は逆の例です。神はアブラハムを大いに祝されました。それゆえに、息子のイサクを祝福するという約束が与えられました。創世記 26 : 1 - 4 「:1 さて、アブラハムの時代にあった先のききんとは別に、この国にまたききんがあった。それでイサクはゲラルのペリシテ人の王アビメレクのところへ行った。:2 **【主】**はイサクに現れて仰せられた。「エジプトへは下るな。わたしがあなたに示す地に住みなさい。:3 あなたはこの地に、滞在しなさい。わたしはあなたとともにいて、あなたを祝福しよう。それはわたしが、これらの国々をすべて、あなたとあなたの子孫に与えるからだ。こうしてわたしは、あなたの父アブラハムに誓った誓いを果たすのだ。:4 そしてわたしは、あなたの子孫を空の星のように増し加え、あなたの子孫に、これらの国々をみな与えよう。こうして地のすべての国々は、あなたの子孫によって祝福される。」、このようなすばらしい祝福の約束が与えられました。

なぜですか？その答えが次の 5 節に書かれています。26 : 5 「これはアブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの戒めと命令とおきてとおしえを守ったからである。」と。神は喜んで私たちに祝してくださる。でも、それは私たちがどのような選択をするかに掛かっています。確かに、私たちはもう十分な祝福をいただいています。こうして健康が与えられて、この日が与えられて、必要なものが与えられて、その恵みをいただいていることを覚え、そのことを感謝するなら、私たちひとり一人が考えるべきことは、

私の毎日の生活はこの方にふさわしい感謝の生活をしているのかどうか？です。あなたに祝福をくださった神が望んでおられることは「わたしに従いなさい」です。そして、そのような者へと神は私たちを造り変えてくださった。そして生きていくのかどうかです。そして、あなたは神の助けをいただきながら従っていくときに、神はこんな私たちを祝してくださるのです。アブラハムが祝されたこと、イサクが祝されたのは神のおきてに従ったからです。もちろん、神の助けをいただきました。

イエス・キリストが群衆と話をしていたときに、それを聞いていた一人の女性が思わずこんなことを叫びました。それはイエスを生んだ母に対する称賛でした。ルカ 11：27「イエスが、これらのことを話しておられると、群衆の中から、ひとりの女が声を張り上げてイエスに言った。「あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです。」、あなたのようなすばらしい方がお生まれになった、その母はすばらしいと。そのときイエスはこのように言われています。11：28「しかし、イエスは言われた。「いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」と。

「神の愛のうちに自分自身を保ちなさい」とユダは言いました。神が喜ばれることを私たちは自ら選択してそのように生きていこうとします。なぜなら、神はそれを喜ばれるからです。そして、そのように私たちが生きていくことは、私たちのような者を愛してくださる神を愛するからです。みことばが言うことは、「あなたの従順さはあなたの神への愛を証明する」です。

どうか、みことばに従う者としてこの一週間も歩んでください。みことばに従うこと、それは私たちが神を愛しているからです。ただ何となく、そのように言われているからではなく、主を愛するその証として、主の命令に従い続けていくのです。感謝なことに、その歩みの助けは神ご自身が備えてくださっています。この歩みをもって私たちの感謝を主にお返ししましょう。